

コロンビアに渡った東洋磁器

長崎大学多文化社会学部 野上 建紀・

テンプロマヨール博物館 エラディオ・テロロス・エスピノサ

1 はじめに

コロンビア共和国（コロンビア）は、南米大陸の北端に位置する国であり、太平洋と大西洋（カリブ海）の両大洋に面し、パナマ、ベネズエラ、ブラジル、ペルー、エクアドルと国境を接している。19世紀初頭のスペインとの独立戦争まで、多くの他の中南米諸国と同様にスペインなどの植民地となっていた。アメリカ大陸の植民地にスペイン国王の分身として君臨したのは、副王である（国本1992. p57）。最初の副王庁は1535年にメキシコ市に設置され、次いで1542年にリマ市に設置されて、スペイン植民地は18世紀初頭までヌエバ・エスパーニャ副王領とペルー副王領に二分されて統治された（国本1992. p57）。当初、現在のコロンビアはペルー副王領に属していた。そして、スペインは植民地の統治機関として、アウディエンスを各地に設置したが、ボゴタ（サンタフェ・デ・ボゴタ）にも1549年に設置された。副王庁のあるリマに設置された7年後のことであった。その後、1717年にヌエバ・グラナダ副王領（Virreinato de la Nueva Granada）が創設され、コロンビアは、パナマ、エクアドル、ベネズエラなどとともにその副王領を構成することとなった。

スペイン植民地時代にガレオン貿易（図1）によってアメリカ大陸に渡った東洋磁器について、2004年より研究を始め、2006年からは現地の博物館等で資料調査を重ねてきた。2006年からメキシコの各都市の出土遺物の調査を開始し、2012年にはグアテマラ、2013年にはパナマ、2014年にはキューバなど中米・カリブ海の調査を行ってきたが、2015年にはペルーへ行き、初めて南米の調査を行った（図2）。そして、今回のコロンビア行きが二度目の南米調査となった。

調査目的は、遺跡からの出土品を中心に東洋磁器の流通の痕跡を探ることである。特に肥前磁器の発見を目的としていた。まだ南米においては、ペルーで染付のチョコレートカップが発見されているだけであり、他の地域や他の種類は未発見であったからである。調査日程は、2016年4月26日～5月7日であった。短い調査期間であったが、ボゴタ、トゥンハ、ビジャ・デ・レイバ、カルタヘナの4

都市の現地調査を行うことができた(図3～7)。その他、ポパヤンで東洋磁器が出土しているという情報を現地で得たが、ポパヤンが位置するカウカ県全域が海外渡航安全情報による渡航中止勧告が出ていたため、現地調査を断念した。また、ボゴタでは上記以外の都市の出土遺物も観察することができた。

2 コロンビア発見の東洋磁器

1) ボゴタ (Bogotá)

ボゴタはコロンビアの首都である。アンデス山脈の東部の標高約2640mの高地に位置する。前に述べたようにスペインによってアウディエンシアが設置され、地方の統治が行われ、さらに1717年にヌエバ・グラナダ副王領が創設され、その首都となつてからは北部アンデス地域の政治的中心地として機能した。

現在のボゴタは、ボリバル広場を中心とした旧市街に歴史的街区が広がり、植民地時代の面影を強く残している(図4)。その旧市街に事務所があるエリガイエ財団(Fundación Erigae)のMonica Therrien 女史、Daniela Vargas 女史の協力を得て、コロンビア国内から出土した東洋磁器の調査を行った(図15-1～11、15・16)。ほとんどが中国磁器であり、主にボゴタ以外の各都市から出土したものであった。ボゴタでは、明代の染付折縁皿(図15-6、図16-1)や碗(図15-1・2、図16-2・3)などがマンサーナ・リエバノ(La manzana Liévano)で出土している他、カテドラル(Catedral Primada)から近代の日本磁器の碗が出土している(図15-16)。碗の高台内には「富士山陶器 MADE IN JAPAN」の銘が富士山のマークとともに入っている。

また、Maria Astrid 女史の案内で、チコス博物館(Museo de Chicos)とコロニアル博物館(Museo de Colonial)の所蔵品の調査を行った。チコス博物館には、主に19世紀以降の中国磁器や日本磁器が所蔵されている。清代の光緒年製銘のティーセットなど色絵製品の各種、明治期の肥前、瀬戸、薩摩などの日本磁器などが世界各地の陶磁器とともに所蔵されている。コロニアル博物館には、明代の染付窓絵鹿鳥文壺、清代の染付蓋付唐花唐草文瓶、清代のいわゆる素描きによる染付花鳥文大皿、清代の染付楼閣山水文皿などがヨーロッパ陶器などとともに所蔵されている。

その他、調査を行った博物館、教会、修道院は以下の通りである。直接、陶磁器と関わりのない博物館であっても室内装飾として東洋磁器を用いている場合があるので、調査対象とした。そして、いずれも東洋陶磁は確認できなかった。

ボテロ博物館(Museo de Botero)、ボゴタ博物館(Museo de Bogotá)、Iglesia

de la Candelaria、黄金博物館 (Museo de Oro)、サン・フランシスコ教会 (Iglesia de San Francisco)、サンタ・ベラクルス教会、Iglesia Franciscana de la Tercera、エメラルド博物館 (Museo Internacional de la Esmeralda)、国立博物館 (Museo Nacional)、モデナの家 (Casa de Moneda)。

2) トウンハ (Tunja)

トウンハは、ボヤカ県の県都であり、首都ボゴタの北東130kmに位置している。トウンハ市内にある教会には、壁面に陶磁器の皿などを埋め込んで装飾としているものがいくつか見られる。カテドラル (Catedral) では、キリスト像の背後の赤い壁面に、ヨーロッパ産の陶器などの皿を見込みの周囲に金に彩色した木製の花卉をあしらいながら、はめ込んで装飾していた。サン・フランシスコ教会 (Iglesia de San Francisco) では、十字形を象った装飾の中心に陶器皿を配して、天井部に貼付けている。

そして、最も数多くの陶磁器を装飾に用いているのが、サント・ドミンゴ教会 (Iglesia de Santo Domingo) である (図8)。サント・ドミンゴ教会は、16世紀後半に建設が行われたが、大部分は16世紀末に行われたという (Sebastián 2006 p. 115)。大天井部をはじめ、多くの天井や壁に陶磁器による装飾を施している。とりわけマリア像のチャペルでは、マリア像の背後の壁や天井を陶磁器や貝殻によって装飾している (図9)。東洋磁器によって装飾されていることがすでに報告されていたが、ガラス越しに観察する限り、東洋磁器を模してはいるものの、そのほとんどはヨーロッパ産の陶器であった。しかし、教会のご厚意により内部に入らせて頂くと、それらの陶磁器の中に16世紀末～17世紀初の景德鎮産の染付皿 (図10左) や17世紀後半の有田の染付花虫文の芙蓉手皿 (図10右) が含まれていることが確認できた。特に後者はコロンビアで初めて確認された肥前磁器である。これまでメキシコシティ、オアハカ、ベラクルス、アンティグア・グアテマラなどで発見されているものであり、ラテンアメリカに広く流通した製品である。サント・ドミンゴ教会のこの皿は、考古資料ではないが、性格的にはメキシコのカサ・デル・リスコの磁器片と同様のものである。すなわち、後世に持ち込まれたものではなく、17世紀後半に輸入されたものを装飾とした可能性が高く、当時の肥前磁器のコロンビアにおける流通を傍証するものとして、貴重な資料である。東洋磁器以外のヨーロッパ陶器皿も意匠は東洋磁器を模したものが多い。その他、ファン・デ・ヴァルガス博物館 (Museo Juan de Vargas) にも同様の装飾が見られた。

その他、調査を行った博物館・教会・修道院は、歴史博物館 (Museo de Histo-

ria)、サンタ・クララ・ラ・レアル (Santa Clara La Real)、エスクリダノ邸博物館 (Museo Casa del Escribano)、コンパーニャ・サン・イグナシオ教会 (Iglesia de la Compañía San Ignacio)、ボヤカ文化基金 (El Fondo Mixto de Cultura de Boyacá) などである。いずれも東洋陶磁は確認できなかった。

3) ビジャ・デ・レイバ (Villa de Leiva)

ビジャ・デ・レイバは、トゥンハと同じくボヤカ県に位置し、スペイン植民地時代の町並みをほぼ完全な形で残す町である。この町では、ルイス・アルベルト・アクーニャ博物館 (Museo Luis Alberto Acuña)、カルメン宗教美術博物館 (Museo de Arte Religioso del Carmen)、アントニオ・リカウルテ博物館 (Casa Museo Antonio Ricaurte)、カルロ博物館 (Museo de Carro) などの博物館の調査を行ったが、東洋磁器は確認できず、ルイス・アルベルト・アクーニャ博物館でヨーロッパ産の陶器皿などによって飾られた壁を見るのみであった。

4) オカーニャ (Ocaña)

オカーニャはコロンビア中北部のノルテ・デ・サントアンデール県 (Departamento de Norte de Santander) に位置する。1570年頃に建設されたという。サン・フランシスコ修道院 (Convento San Francisco) で、18世紀代の中国磁器の色絵チョコレート碗が出土している (図15-8、図16-4)。

5) カルタヘナ (Cartagena)

カルタヘナはカリブ海に面した港町である。ボリバル県の県都であり、スペイン植民地時代の歴史的建造物が数多く残っており、1985年には「カルタヘナの港、要塞、歴史的建造物群」が世界遺産に登録されている。ポトシ銀山の銀をはじめとした南米の産物を大西洋側へ輸出する重要な港であり、またアフリカとアメリカを結ぶ奴隷貿易の中心地でもあった。

海洋博物館前の城壁 (Murallas frente Museo Marino) から16世紀末～17世紀初めの中国の景德鎮産の染付折縁皿が出土している (図15-4・5、図16-8・9)。サン・イグナシオ堡塁 (Baluarte de San Ignacio) から17世紀後半～18世紀前半の景德鎮産の染付に金彩を加えた色絵折縁皿 (図15-7、図16-11) が出土している。サント・ドミンゴ修道院 (Convento Santo Domingo) から染付八角碗 (図15-9、図16-13) と染付碗 (図15-3、図16-10)、海洋博物館前の城壁から色絵八角碗 (図15-10、図16-12) が出土している。

1998～1999年に Monika Therrien と Gonzalo Correal が行ったサン・ペドロ・

クラベール広場と回廊 (La Plaza y Claustro de San Pedro Claver) の発掘調査による出土遺物が、サン・ペドロ・クラベール教会 (Iglesia de San Pedro Claver) の展示室に展示されている。16世紀から19世紀にかけての遺物があり、その中に中国磁器片が3点含まれていた (図15-12~14)。16世紀末~17世紀初めの景德鎮産の染付皿 (図15-12)、16世紀末~17世紀前半の漳州窯系の染付皿 (図15-14)、そして、詳細な年代は不明であるが、景德鎮産の染付皿 (図15-13) である。また、ホテル・サンタ・クララ (Hotel Santa Clara) でも出土品の展示が行われていたが、少なくとも展示品の中には東洋磁器は確認できなかった。

その他、調査を行った博物館、教会、修道院は以下の通りである。カルタヘナ歴史博物館 (Museo Historico de Cartagena)、サント・ドミンゴ教会 (Iglesia Santo Domingo)、サン・フェリペ要塞 (Castillo de San Felipe)、セルロ・デ・ラ・ポパ (Cerro de la Popa)、カテドラル (Catedral) などであり、いずれも東洋陶磁は確認できなかった。

6) サンタ・マルタ

コロンビア北部に位置し、マグダレーナ県 (Departamento del Magdalena) の県都である。アドゥアナ邸 (Casa de la Aduana) から16世紀末~17世紀初めの中国の景德鎮産の染付折縁皿が出土している (図15-11、図16-14)。

7) マドリッド・クンディナマルカ (Madrid, Cundinamarca)

コロンビアの中央部のクンディナマルカ県 (Departamento de Cundinamarca) に位置する。近代の日本磁器の色絵皿が出土している (図15-15)。エナメル質の絵具で上絵付けされた小皿であり、カップアンドソーサーのソーサーである可能性がある。

8) ポパヤン (Potayan)

ポパヤンは、カヤカ県の県都である。黄金都市の噂を聞きつけたキト総督のセバ스티アン・デ・ベラルカサルは、1536年にキトを出発して北進し、ボゴタへの途上、ポパヤンの町を建設している (千代2011p. 73)。前に述べたように、今回は治安情勢により現地調査を見送ったが、Diógenes Patiño Castaño や Leonaldo Patiño より、中国磁器が出土しているとの教示を得て、写真でも確認した。

3 コロンビアに渡った東洋磁器

2015年のペルー調査に引き続き、2016年も南米の調査を実施した。その結果、ボゴタ、カルタヘナ、サンタ・マルタ、オカーニャ、ポパヤンで中国磁器、ボゴタやマドリッド・クンディカマルカでは近代の日本磁器が出土していることを確認した。中国磁器はいずれもガレオン貿易時代のものであるが、近代の日本磁器はガレオン貿易の終焉後の製品である。また、トゥンハでは、中国磁器と日本磁器（肥前磁器）が教会の装飾に用いられていたことを確認した。出土地点は、海岸地域から内陸部にまで幅広く存在しており、コロンビア国内に広く流通していたことが理解できる。

年代は最も古いものが16世紀第4四半期の中国磁器であり、数は最も多い。産地としては景德鎮産のものが多いが、漳州窯系の製品も1点のみ見られた。そして、17世紀後半の肥前磁器1点が教会の装飾の中に確認された。次いで17世紀第4四半期から18世紀前半にかけての中国磁器を数点確認した。一方、ペルーで確認された黒褐釉大壺のような東南アジア産の陶器は伝世品も含めて、今回は確認できなかった。

製品の種類については、いずれもこれまで中南米で発見されている製品である。他の中南米の需要と共通するものとみてよい。

確認できた点数は非常に少ないものであったが、これは一つには発掘調査例の少なさにもよるのであろう。例えば、東洋陶磁の最大の荷揚げ港であったと考えられるアカプルコでも出土した東洋陶磁の量はまだ極めて少なく、今後の調査によって資料数が増加することが見込まれる。

次にこれらの陶磁器のコロンビアへの流通ルートを考えてみたい。同じ南米のペルー副王領の首都であるペルーのリマへの流通ルートについては、大きく3つのルート考えた（野上・テレーロス2016）。一つ目はマニラからアカプルコやパナマを経由するか、あるいは直接カヤオへ運ばれるルート、二つ目はベラクルスからハバナなどカリブ海に運ばれたものが、パナマ経由でカヤオに運ばれるルート、三つ目はアルゼンチンのブエノスアイレスからコルドバを経由して、ポトシに運ばれるルートである。いずれもポトシ銀山の銀がアジアやヨーロッパへ輸出されるルートあるいはポトシ銀山などに生活物資が持ち込まれるルートである。

コロンビアは、17世紀当時はペルー副王領に属していたが、後にヌエバ・グラナダ副王領となっている。太平洋と大西洋の両方の大洋に面した国であり、内陸部についてはいずれかの港から陸路で運ばれたものと考えられる。

太平洋側から持ち込まれたものである場合、コロンビアのブエナVENTOURAやエクアドルのグアヤキルなどに荷揚げされ、陸路でボパヤン、ボゴタ、トウンハ、オカーニャへと運ばれることになる。ブエナVENTOURAやグアヤキルへは、アカプルコかパナマを経由して荷揚げされたと考えられる。あるいはカヤオに一度、荷揚げされたものがペルー副王領内で流通したことも考えられる。

一方、大西洋側から持ち込まれたものである場合、カルタヘナに荷揚げされ、陸路で各都市に運ばれたと考えられる。カルタヘナへは、ベラクルスからハバナなどを経てもたらされたと考えられる。すなわち、マニラからアカプルコ、メキシコシティ、ベラクルスへ、太平洋と中米を横断し、カリブ海を経て運ばれたということになる。

太平洋側からのルートは、ペルー副王領のリマへの流通ルートで挙げた一つ目のルートの分流であろうし、大西洋側からのルートは、同じく二つ目のルートの分流と考えられる。いずれも生産地のアジアからの長大なルートであることになり、またこれらはポトシ銀山の銀がアジアやヨーロッパへ輸出されるルートを逆になぞるルートでもある。一方、カルタヘナの場合、アフリカからアメリカへの奴隷貿易の中心地でもある。多くの船がアフリカから渡ってきた港町であるが、奴隷貿易の場合、アフリカとアメリカの二大陸間貿易というより、ヨーロッパ商人が介在する三角貿易である。アジアとアメリカの間の銀とアジアの産物の貿易のように、単純な交換の構図とはならない。またアフリカからコロンビアへ奴隷とともに磁器が運ばれたとも考えにくい。

4 おわりに

今回の調査における最も大きな成果は、コロンビア国内で初めて近世の肥前磁器の存在を確認できたことであろう。発掘調査による考古資料におけるものではなかったが、教会の装飾としての遺物は、後世の骨董品としての流通によるものとは考えにくく、生産年代である17世紀後半に輸入されたものが装飾として利用されたと考える方が妥当であろう。2015年のペルーの調査で有田のチョコレートカップが南米まで運ばれていたことは明らかになっていたが、染付芙蓉手皿もまた南米にもたらされていたと考えてよいであろう。

一方、中国磁器が南米において出土することはこれまでも知られており、報告も散見されるが、まだ十分に調査されているとは言えない状況である。調査の遅れについては資料数の問題もあるが、陶磁器を専門的に観察できる人材が不足しているためでもであろう。今後、更に協力ができればと思う。

最後にこの研究の可能性について述べる。陶磁器の貿易を知るためには、銀の貿易、奴隷貿易など、他の貿易の実態を知ることにも必要となる。南米ではチョコレートカップが普遍的に出土するが、当時は他地域でも飲料の嗜好品に対する大きな需要があった。そして、飲料の嗜好品は砂糖を必要とし、その生産のプランテーションのために労働力としての奴隷も必要となってくる。今回、コロンビアで最も多くの東洋磁器の出土が確認できたカルタヘナは、南米の銀などのヨーロッパへの重要な輸出港であり、かつアフリカとの奴隷貿易で栄えた港でもある。南米への陶磁器の流通を知することは、アジア、アメリカ、アフリカ、そして、ヨーロッパがどのようなグローバルな貿易活動を行っていたか、知ることにつながるものであり、今後の研究の可能性の大きさを感ずることができるものである。

最後に本研究を行うにあたり、多くの方々のご協力を得た。芳名を記して謝意としたい。

Monica Therrien、Daniela Vargas、Maria Astrid、Fr.José Gregorio Hernandez Tarazona、Jhony Mauricio Pacarita、Salim Osta Lefranc、Constanza Toquica C.、Diógenes Patiño Castaño、Juan Guillermo Martin Rincon、Maria Astrid y su esposo、Angélico Suaza、Teresita Cordero、Martin Andrade Pérez

参考文献

国本伊代1992『概説ラテンアメリカ史』新評論

千代雄一2001「征服から植民地期」『コロンビアを知るための60章』明石書店 pp. 71-75

野上建紀2010「カサ・デル・リスコの東洋磁器」『金大考古』67号 pp. 10-18

野上建紀2013「ガレオン貿易と肥前磁器—二つの大洋を横断した日本のやきもの」『東洋陶磁』第42号 pp. 141-176

野上建紀2016「ガレオン貿易と中国磁器—新大陸に向かう東回りの陶磁の道—」『東洋陶磁』第45号 pp. 59-79

野上建紀・エラディオテレーロス2016「バレーに渡った日本磁器」『横浜ユーラシア文化館紀要』第4号

Sebastián, Santiago 2006. *Estudios sobre el arte y la arquitectura coloniales en Colombia*. Corporación la Candelaria Convenio Andrés Bello (Bogotá)

【付記】本研究ノートは、平成26～28年度科学研究費（基盤研究（C）（一般））（課題番号26370757アジア・太平洋海域における有田焼交易ネットワークの考古学的研究）の成果の一部である。

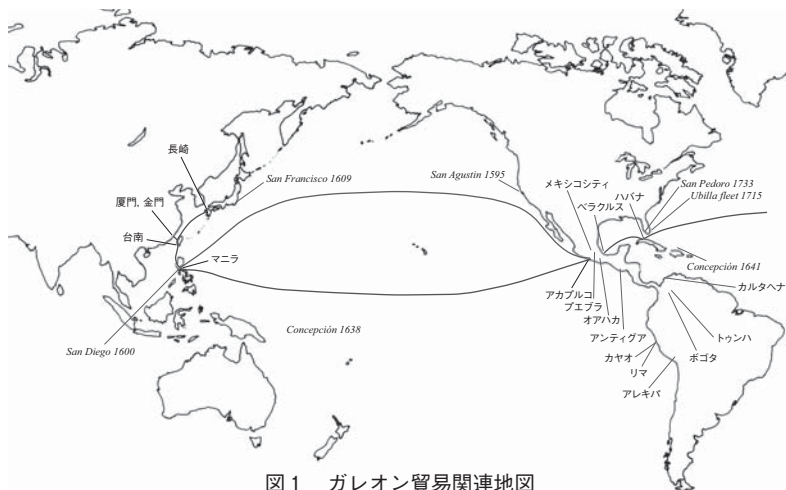


図1 ガレオン貿易関連地図



図2 南アメリカ大陸地図

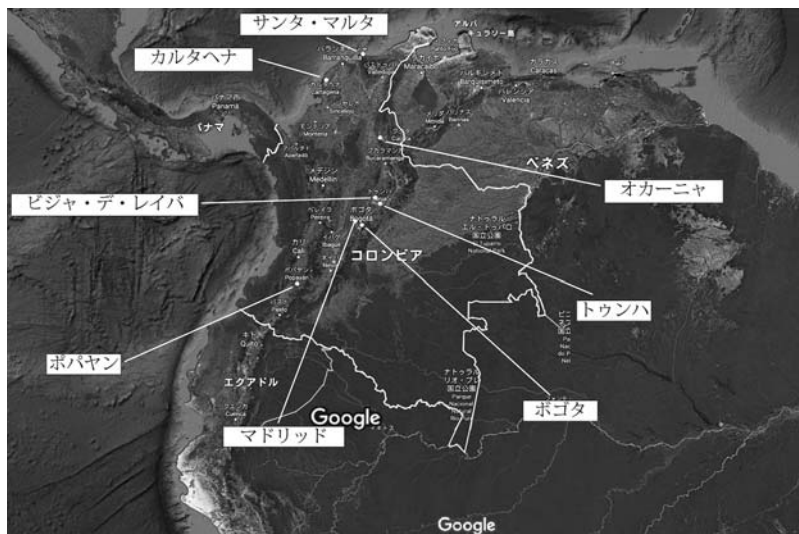


図3 コロンビア全体図



図4 ボゴタのボリバル広場



図5 トウンハのボリバル広場



図6 ビジャ・デ・レイバの中央広場



図7 カルタヘナの町並み



図8 サント・ドミンゴ教会(トゥンハ)



図9 サント・ドミンゴ教会内部(トゥンハ)

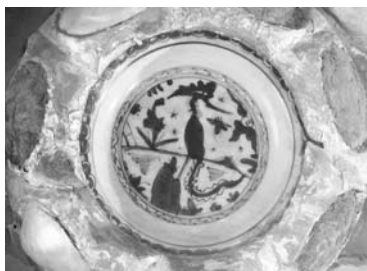


図10 サント・ドミンゴ教会装飾の中国磁器(左)と肥前磁器(右)(トゥンハ)



図11 カルタヘナの旧市街を遠望



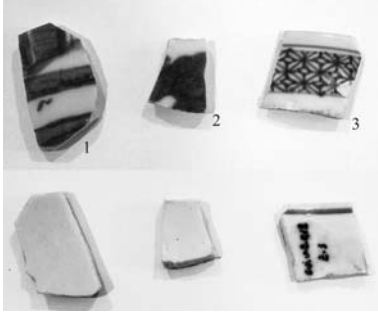
図12 サン・フェリペ要塞(カルタヘナ)



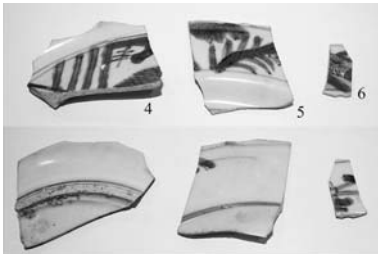
図13 サント・ドミンゴ教会(カルタヘナ)



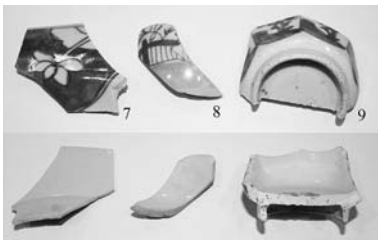
図14 サン・ペドロ・クラベール教会(カルタヘナ)



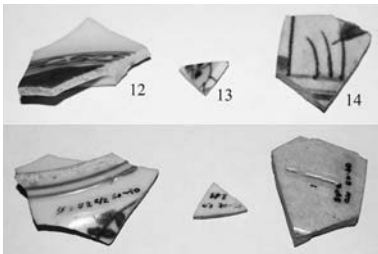
(Courtesy: Fundación Erigaie)



(Courtesy: Fundación Erigaie)



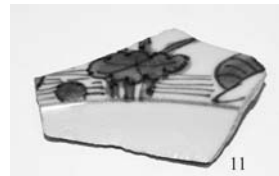
(Courtesy: Fundación Erigaie)



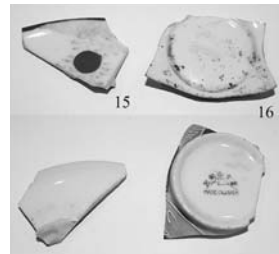
(Courtesy: Iglesia de San Pedro Claver)



(Courtesy: Fundación Erigaie)



(Courtesy: Fundación Erigaie)



(Courtesy: Fundación Erigaie)

図15 コロンビア出土東洋磁器 (1)

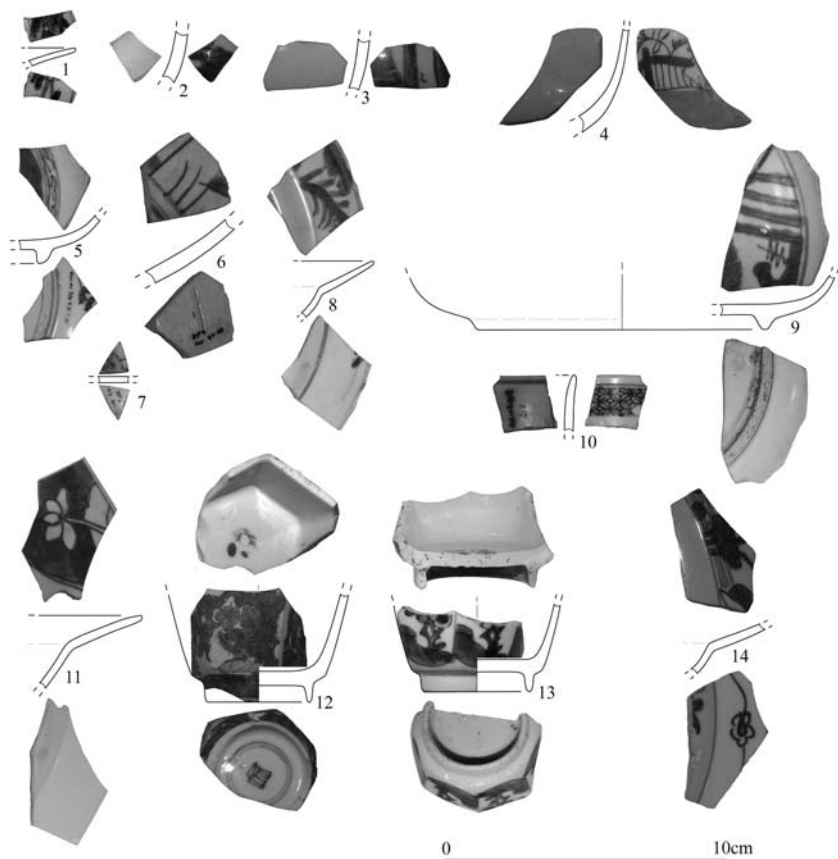


図16 コロンビア出土東洋磁器（2）